えのき　がいと　　かいど　いせき　　じごくざわ

榎垣外・海戸遺跡・地獄沢
発掘調査報告書

（概　報）

平成４年度榎垣外遺跡ほか発掘調査報告書

長野県岡谷市教育委員会

序

平成４年度の榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡の発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

毎年、周知の遺跡内での土木工事が数多く申請されますが、これらにつきましては発掘調査及び試掘調査の対応を行い本年度の調査件数は25件にのぼりました。

今年度の調査では、地獄沢遺跡から縄文時代中期の住居跡５棟と小竪穴434基が発見され、海戸遺跡においては平安時代住居跡１棟、弥生時代住居跡４棟のほか、縄文時代小竪穴22基が発見されました。また、榎垣外遺跡からは平安時代の建物跡と思われる柱穴が多数発見されるなど、多くの貴重な遺構、遺物が発掘されました。

近年は特に個人住宅などの小規模開発が多く、これからも発掘調査が積み重ねられていくことが予想されますが、これらの調査資料の蓄積が原始・古代の岡谷市の歴史を復元する資料となることでしょう。

今後、この報告書が学術文化の向上に活用されることを願っております。

今年度調査の報告にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力にお礼申し上げます。また、発掘調査に携わっていただいた皆さんには、炎暑、厳寒の中を御苦労いただき感謝申し上げます。

平成５年３月19日

岡谷市教育委員会

教育長　齋藤　保人

例　言

1．本報告書は、平成４年度榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）である。
2．調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成４年４月16日から平成５年３月19日にかけて実施した。整理作業は主に１月～３月に行ったが出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。
3．出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会で保管している。
4．本報告書中の原稿執筆は海戸遺跡を林賢が、地獄沢遺跡を河西清光が、榎垣外遺跡を小坂英文が担当し、全体の編集、作図は事務局で行った。

目　次

序
目次
1．平成４年度調査の概要……1
2．榎垣外遺跡嶬嶬塚地籍……3
3．海戸遺跡……4
4．地獄沢遺跡……10

1．平成４年度発掘調査及び試掘・確認発掘調査の概要

平成４年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応を実施した件数は28件をこえ、そのうち試掘・確認発掘調査は25件に及んでいる。そしてそれからさらに発掘調査したケースは３件３遺跡である。

本年度の調査の特徴は、ここ数年続いている傾向に同じで、長地方面の平坦部（湖北地区沖積地）に調査が集中していることである。従って、縄文時代の遺構・遺物は、地獄沢遺跡において小竪穴群が発見された以外は他の遺跡において少ない数である。これに対して弥生・奈良～平安時代の遺構・遺物は多く検出され、市内では比較的数の少ない弥生時代住居跡が発見されたり、灰釉陶器壺などが出土した。

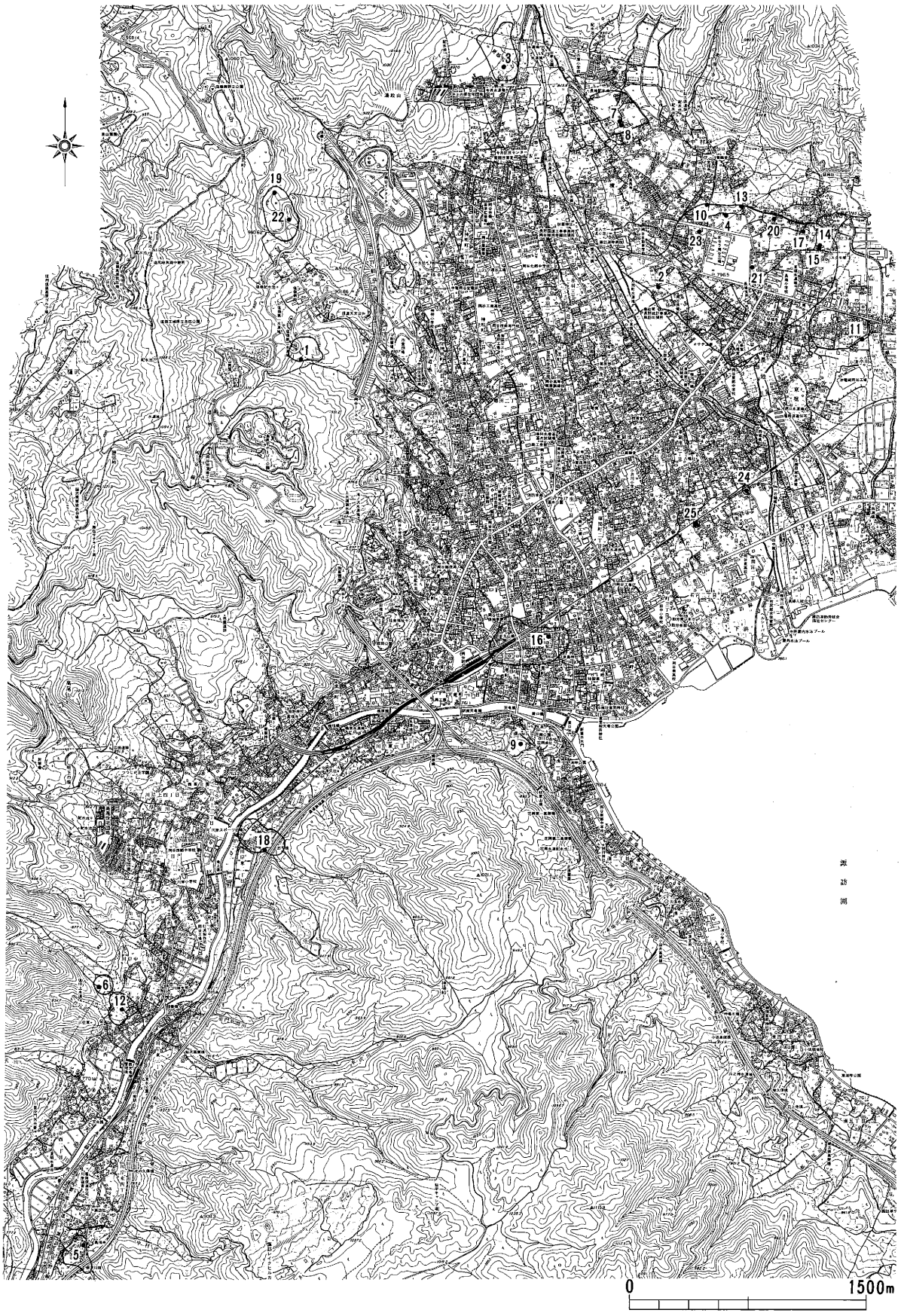
調査の中で注目すべきものは、地獄沢遺跡の成果であろう。これまでほとんど発掘調査の行われていない遺跡であったため、遺跡の正確な時代も不明であったが、400基を越える縄文時代中期の小竪穴、住居跡が発見され、多くの土器や石器を得ることができたことは大きな成果があった。

また、海戸遺跡では、昭和41年以来の大きな発掘調査となり、その当時完全に調査することのできなかった住居跡を再確認し調査することができたばかりか、この住居跡に重複する多くの住居跡を完全に調査することができたため、集落の広がりを知ることができた。今後とも僅かな面積の農地転用であっても確実に調査を継続することによって、これまでの調査で得られた成果をより一層充実させることにより、さらに広い遺構群全体を概観し遺跡の性格を確定することができるであろう。

なお、発掘調査については本文中にその概要を記したが、試掘調査によって遺構が発見されず発掘調査にいたらなかった箇所については以下の表によることにして詳細は省略した。

表１　平成４年度試掘・確認発掘調査一覧表

	遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代外	
1	大曲	字半ノ木2104-1外	工業団地造成	4.13～ 4.16		縄文	
2	榎垣外（下片間町）	長地字下片間町2379-1	駐車場敷地	4.13～ 4.28	平住２小竪１	縄文・平安	
3	地獄沢	字上ノ原 216-1外	住宅建設	4.14～ 9. 2	縄住５小竪 434	縄文	発掘調査
4	榎垣外（向田通）	長地字向田通4725-1	貸住宅建設	4.20～ 4.24		平安	
5	原沢	川岸東四丁目7341-1	駐車場敷地	5.12～ 5.19		縄文	
6	新倉長塚	川岸西一丁目3762-1	資材置場	5.20		縄文	
7	上屋敷	長地字上屋敷5214-1	住宅建設	5.21～ 6.17		縄文	
8	上屋敷	長地字上屋敷5214-4	資材置場	5.21～ 6.17	縄住１	縄文	
9	花岡城址	湊一丁目3919-3外	宅地造成	6.16～ 6.19		中世	
10	榎垣外（向田）	長地向田4711-8外	駐車場敷地	7. 2～ 7. 9	平住１	平安	
11	東町田中	長地田中海道下 470-4外	貸事務所、倉庫	7. 9～ 7.10		弥生	
12	長塚	川岸西一丁目3911-1外	駐車場敷地	7.10～ 7.31	縄住２	縄文	
13	榎垣外（古屋敷）	長地字古屋敷4118-7	建売住宅	9.24～ 9.28		平安	
14	榎垣外（栗木海戸）	長地字栗木海戸3659-4	住宅敷地拡張	10. 7～10.12		平安	
15	榎垣外（栗木海戸）	長地字栗木海戸3659-2外	住宅建設	10. 7～10.12		平安	
16	海戸	天竜町三丁目5330-2外	住宅建設	10.19～12.12	弥住４平住１	縄・弥・平	発掘調査
17	榎垣外（蟶蟒塚）	長地字蟶蟒塚3685-5	住宅建設	10.22～11.10	弥住１柱穴24基	弥生・平安	発掘調査
18	志平	川岸字山神平9697-1外	墓地拡張	11.12			
19	牛平北	字西山 1723-18外	工業団地造成	11. 6～12.21		縄文	
20	榎垣外（榎海戸）	長地字榎海戸4064-9外	駐車場敷地	3. 1～ 3. 5	縄住１	縄文	
21	榎垣外（金山東）	長地字金山東2890-6外	住宅建設	3. 1～ 3.19	平住２	平安	
22	牛平北	字西山 2075-41外	国道改良工事	3. 4～ 3. 5			
23	榎垣外（西原）	長地字西原4790-1	住宅敷地拡張	3. 5～ 3.12		平安	
24	阿原神田	南宮一丁目9802-7外	建売住宅	3. 9～ 3.19		縄文・弥生	
25	清水池	若宮一丁目8052-6外	ＪＲ立体交差事業	3. 8～ 3. 9			



第１図　試掘・確認発掘調査地点（番号は表１の一覧表に同じ）

2．榎垣外遺跡蟹塚地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字蟹塚3685-5
2．土地の所有者　　矢崎　勝郎
3．発掘調査の期間　平成４年10月22日～11月10日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　１３２．４㎡
6．発見された遺構　弥生時代住居跡１棟
　　柱穴24基

今回の調査区は、ここ数年個人住宅による開発が多く行われている地域で調査が頻繁に行われていた区域の一角である。近くにある保育園建設のときの調査では大型の掘立穴建物跡が発見され官衙跡であることが明らかとなっている。

これまでの調査でもこのほかに掘立柱建物跡や柱穴が数多く発見されているが、その反面居住のための住居跡は発見されていない。また発見された柱穴もすべて建物跡としての配列があるわけではない。

今回の調査では、24基の柱穴が発見されたが、この中で５基（Ｐ715～Ｐ720）については、平面形が約１ｍで覆土が黒色土であるなどの共通点があり、建物跡となるかと思われたが、調査区外へと遺構の延びる箇所は以前に調査しており、柱穴の存在は無いことが確かめられているため、今回の調査では建物跡の発見はなかった。このように３、４基は並ぶかのように見えても、建物跡と成り得ないようなものや単独のものが多く、建物跡の希薄な部分があることを示している。

これまでの調査でこれらの柱穴の中に、弥生時代の小竪穴が発見されたり、遺構検出のときに弥生土器や、大型の打製石斧など弥生時代の遺物が時折見られることがあり、これまでの調査の中でも付近に弥生時代の住居があるのではないかと予想されていた。はからずも今回、耕作によってかなり破壊を受けているものの、弥生時代と思われる４号住居跡の一部を検出することができたことは大きな成果であった。

平面形は東西約 5.8mであり南北は調査区から外れるため不明である。住居跡に伴うピットは５基発見されたが、このうち柱穴と思われるものは２基あり、深さはともに床面より約50cmである。弥生時代小竪穴は以前の調査によりこれまでに２基発見されており、数片の土器と黒耀石片が出土している。

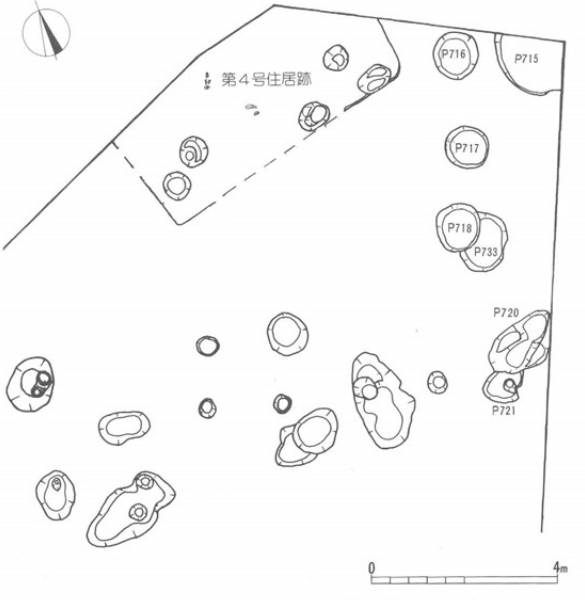
7．出土した遺物　石鏃１　土器片・石片１箱

耕作土を剝ぐと部分的に褐色土が残っているもののほとんどが砂礫層となるため、遺物の出土数は少ない。

遺構の中からも小破片が若干出土するだけで個体として数えるには至らない。４号住居跡は耕作により攪乱を受けているために、覆土がほとんど残っておらず、土器片が僅かに出土しただけである。

第２図　遺構検出状態

第３図　柱穴柱痕跡検出



第４図　蟹蟹塚地籍遺構全体図（１：160）

3．海戸遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市天竜町三丁目5330-2外
2．土地の所有者　浜　百合子
3．発掘調査の期間　平成４年10月19日～12月12日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　１４６．０㎡
6．発見された遺構　弥生時代住居跡４棟　平安時代住居跡１棟　縄文小竪穴22基

調査の概要　今回の調査は昭和40年、41年に行われた第１次、第２次に続く海戸遺跡の第９次の発掘調査である。

調査された区域は第１次、第２次の調査区域の東北部分に接している。当時住宅地域であったため調査の区域外であったが、今回この住宅の改築によって庭となっていた部分の調査をすることになった。

調査の対象面積は約439㎡であるが、北側のほぼ半分は以前住宅造成の際ローム層まで削土されているため、遺構はすでに削られており発見することはできなかった。南側半分146㎡は調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡が27号、64号、66号、67号の４棟、平安時代の竪穴住居跡は65号１棟が発見された。また縄文時代中期の小竪穴が22基、柱穴45カ所が見つかったが、第１次、第２次調査で見つかった小竪穴群に続くものであり、規模がより拡大して海戸の縄文時代における集落構造を充実させる結果となった。

なお、遺構に付けられている番号は第１次、第２次調査に付けられた遺構番号（註１）に続けて付けられたものである。

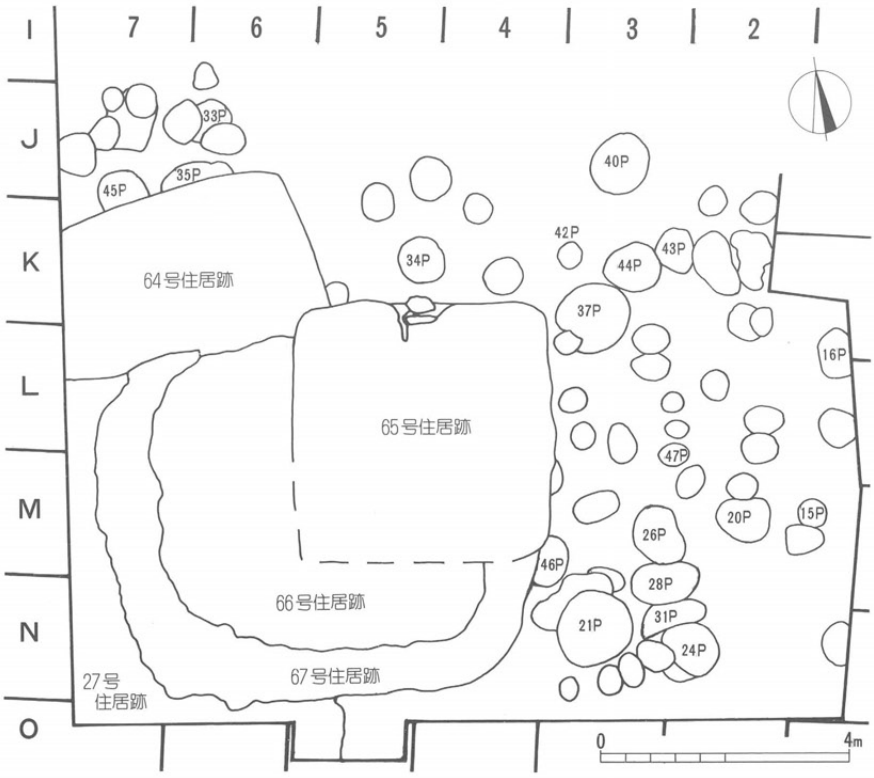
第27号住居跡　本跡は第１次調査で検出された弥生時代の竪穴住居跡である。当時、東側の部分は調査区域外であったので全体を調査することができなかった。

今回調査の結果、27号住居跡の東半分は後述する67号住居跡と重複しており、27号住居跡の床面に67号住居跡の周溝がめぐっていたため、本跡の東の限界を明確にできなかった。

床面は堅くたたかれており、本跡に付随すると思われる遺物はほとんどなかっ

第５図　64号住居跡

第６図　64・65号住居跡



第７図　海戸遺跡遺構配置図（１：120）

た。 N－5グリッドの拡張部に見つかった柱穴は本跡の東隅の主柱穴と思われる。

第64号住居跡　本跡はK・L－6・7グリッドに検出された弥生時代の竪穴住居跡と推定される遺構である。

主軸は東北方向を示し、平面形は隅丸長方形である。南側の半分以上が27号、65号、66号、67号住居跡によって切り込まれており、全体の様子を知ることができず、北東隅を含む 1/4程度が検出されるにとどまった。

耕作土を排除するとその下層から褐色土層が見つかり、その土層にやや黒味をおびた黒褐色土の落ち込みがみられ、本跡の輪郭を発見することができた。この覆土から土器片が多く出土した。

北東隅の壁の掘り込みは8cm、そのほかの周壁の高さは約10cmでめぐっている。床は南側にわずかながら傾斜しており、あまり堅くはない。

柱穴は3ヵ所発見された。P1は西南壁際にあり直径60cm、短径40cm、深さ20cmである。P2は東壁の中頃の2mほど内側にあり直径56cm、短径48cm、深さ29cm。P3は北東隅の内側にあり直径30cmの円形、深さ46cmで柱穴内の周壁に沿って4ヶの礎石が置かれていた。炉跡は27号住居跡に切られているためか見つからなかった。

遺物は床面直上から粘板岩製の磨製有穴石鏃1点、高坏の脚部2点が弥生式土器片とともに出土した。なお、本跡の床を削土すると床下から縄文時代の小竪穴や柱穴が検出された。

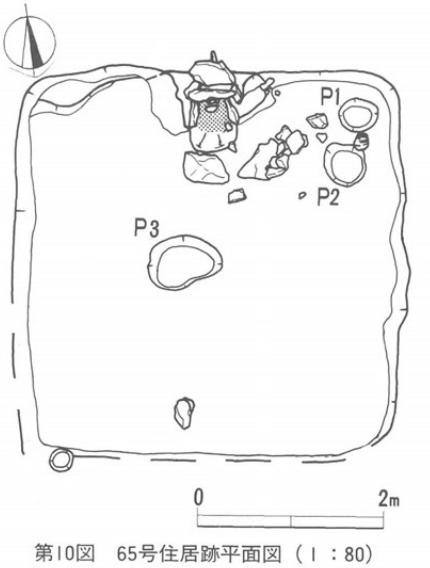
第65号住居跡　本跡は調査区のほぼ中央で発見された平安時代の竪穴住居跡である。

主軸は南北方向を示す。東西約4m20cm、南北約4mの隅丸方形である。遺構検出では、黒褐色土層の掘り込みが北壁と東壁にみられたが、西壁、南壁は後述する67号住居跡の上層に本跡が構築されたため不鮮明であり、セクション精査により確認された。壁高は15～18cmであるが、東壁は砂礫層を掘り込んでいるため崩れやすい。

本住居跡は、西壁の北半分から北壁および壁の直下に幅10cmほどの周溝がめぐるが、西南の壁下にはみられなかった。床面は若干の凹凸はあるがほぼ平坦で、北壁および東壁に続く床は部分的に非常に堅い。西南の床の大部分は貼床されている。

第8図　65号住居跡　カマド周辺

第9図　65号住居跡　カマドに使われた石皿



第10図　65号住居跡平面図（1：80）

柱穴は北東隅に2ヶ所、P1・P2がある。P1は直径45cmの円形、深さは15cm。P2は直径40cmの円形、深さは10cmである。北西隅の内側、東南隅には板状の石が据えられており、柱穴と何らかの関わりがあると思われる。西南部では検出できなかった。

床の中央部には東西80cm、南北55cmの楕円形の軟弱な部分が見つかり、深さ10cmほど掘り下げると本跡の下にある67号住居跡の堅い床が見つかった。また、西北隅の床は直径1mほどの円形に焼土あるいは灰が置かれたと思われる灰白色化した床面であった。

カマドは北壁の中央部に作られた石組カマドである。焚口の幅は43cmで、両側に厚さ10cm高さ28cmの扁平な石が立てて据えられている。燃焼部は船底形に掘られ、壁に向かって一段と高くなり煙道部に続いている。煙道部は３ヶの扁平石が並列に据えられ、真中の１つは半折された石皿が転用されている。両袖石の上は扁平な石３ヶを使って蓋されている。燃焼部の底面は赤褐色に焼土化しており、その厚さは10～15cmに達している。燃焼部の両袖石の外側は粘土で覆っている。焚口部の前には構築に使われたと思われる石が散在し、この間から土師器坏１点、灰釉陶器４点が出土している。それ以外の遺物は少ないが、柱穴Ｐ１・Ｐ２の間から灰釉の長頸壺の胴部が頭を南に向けて横倒して出土した。壺内は 1/3に土が入っていた。

第11図　65号住居跡　カマドの石組

第66号住居跡　本跡は67号住居跡の下層に検出された弥生時代の竪穴住居跡である。主軸は南北方向で一辺約５ｍ80cmの隅丸方形である。壁は地山を掘り込んで造られており、西北隅で64号住居跡の床より褐色土層を25cm、ローム層を15cm掘り込んでいる。北東隅では65号住居跡の床より褐色土層を26cm、南壁はローム層を５cm掘り込んでいる。西壁は認められず、27号住居跡の床面とほぼ同一レベルであったが、周溝を発見することができたため、範囲を確定することができた。

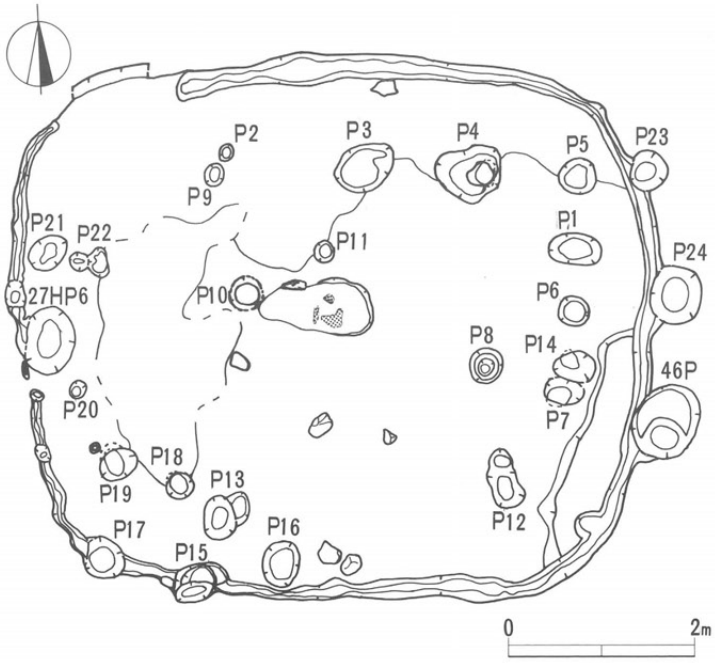
第12図　67号住居跡

周溝は幅20～30cm、深さは約15cmで不整形であるが壁の直下を全周する。北壁に沿う周溝は67号住居跡の周溝と共通している。これは66号住居跡と67号住居跡との関係を示すものであろう。床面はほぼ平らで全面にわたり堅い。特に北西部は非常に堅い。

柱穴は13ヵ所検出されたが、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ７・Ｐ９の４本を主柱穴とする。Ｐ１は西南隅にあり、南北に細長く、深さは14cmである。Ｐ２は西南隅にあり、直径25cmの楕円形で深さは22cm。Ｐ７は東南隅にあり、直径30cmの円形で深さは20cm。Ｐ９は北東隅にあり、直径30cmの円形で深さは16cmである。

西南部に周溝の途切れる部分が見られるが、この部分が出入口であろうと思われる。

炉は竪穴のほぼ中央部にあり、長径60cm、短径50cmの不整の楕円形で焼土の厚さは８～10cmである。土器片は少ないが、その多くは弥生時代後期のものが多い。



第13図　67号住居跡平面図（１：80）

第67号住居跡　本跡は65号住居跡の調査終了後、その下層10～20cmに検出された弥生時代の竪穴住居跡である。

主軸は南北を示し、長径７m20cm、短径６m20cmで東西に長い隅丸の長方形である。東壁、北壁は65号住居跡の床を10～20cm掘り込み、南壁は黒褐色土層を40cm、褐色土層を25cm掘り込んでいる。西壁は27号住居跡の覆土を70cmほど掘り込んでいたものと思われる。北壁はローム層を切り込むが、東壁は褐色土層中に砂礫が含まれた土層を掘り込むため、非常に崩れやすい。

周溝は幅15～20cm、深さ約６cmで不整形ではあるが住居跡を全周している。溝内には小ピットが点在している。

床面は壁際が若干高く、中央部は低くなっている。これは中央部が下層にある66号住居跡の覆土に貼り床しているためであろう。床面は平均して堅く、特に炉の周囲は非常に堅い。床のほぼ中央部に東西１m30cm、南北60cm、深さ10cmほどのくぼみがみられたため、これを炉跡とする。その中に直径30cmの不整円形の焼土が検出され、さらにその下層に66号住居跡の焼土がみられた。

東壁の中央から東南隅にかけて幅60cm、長さ２m60cmの帯状の高い部分が見つかった。床より10cmほど高く表面は軟弱である。

本跡に検出された柱穴は20ヵ所以上に達する。この地域に遺構の複合があるからであろう。P19・P３・P４・P12・P21・P14の６ヵ所を主柱穴と想定する。P19は西南隅にあり、長径40cm、短径32cm、深さ40cm。P３は西北隅にあり、長径45cm、短径30cm、深さ33cm。P４は東北隅にあり、長径40cm、短径30cm、深さ29cm。P12は東南隅にあり、長径58cm、短径36cmの不整楕円形。深さは35cmで２回以上使用された可能性がある。P21は西壁側の中央にあり、長径48cm、短径30cm、深さ13cm。P14は東壁側の中央よりやや南下にあり、直径40cmの円形で、深さは26cmである。北壁際直下の周溝は66号・67号両住居で遺された可能性があり、66号の東南西の三方向に拡張され67号住居跡のものとも考えることができる。本跡からの遺物が少ないのは、上層部に平安時代の住居跡65号が作られた結果であろう。

小竪穴及びピット群　今回の調査で発見された小竪穴は22基、ピットは45基であった。これらは第２次調査で発見された小竪穴群の東側に続くものであり、海戸遺跡の地形の中では、最も標高の高い微高地にある。小竪穴は砂礫層を掘り込んでいるため崩れやすく、また重複している遺構は覆土が良く似ているため、新旧の判別ができないものが多い。

第14図　27・67号住居跡　切り合い

第15図　66・67号住居跡

第16図　66・67住居跡　南壁

遺構内から出土した土器は、すべて縄文時代中期の遺物である。遺構内には特に構築した様子はないが、32Pにおいては石が詰められていた。また、40Pからは一括土器が出土した。今回発見された小竪穴には2～3個の石が入っていたり、土器片が出土しているが、遺構の性格を決定するだけの資料ではない。以下、小竪穴の分布は3箇所に集中する傾向にあるので、それにしたがって概略を記しておく。

調査区北西のグループは64号住居跡の下から発見された遺構を中心とした一群である。J－6・7、K－7の3グリッドにわたって濃密に発見されている。耕作土と遺物を多く含む褐色土を取り除くと砂礫を含む褐色土層があり、この面において遺構確認が行われた。32P・39P・41Pは重複しており平面形は不整形である。39Pは深さ35cmを測る。基底部近くには20個ほどの大小の石が詰められているが、他の小竪穴にも2～3個の石が混入しているものがある。38Pの確認面からは黒耀石が6個まとまって出土したが竪穴に伴う遺物であるか不明である。

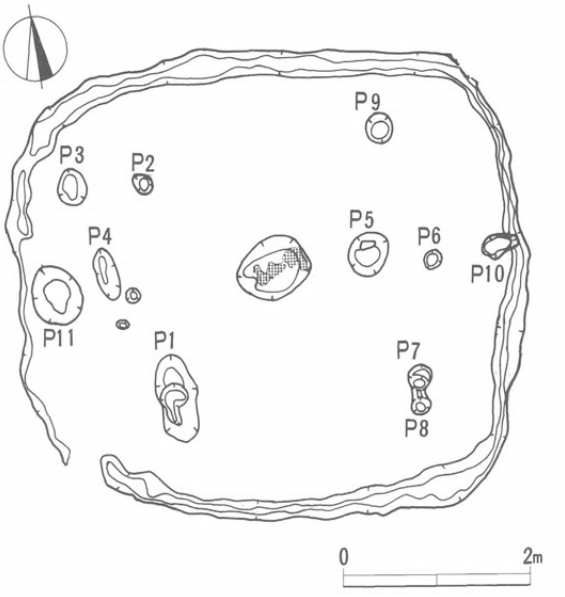
中央から東のグループはJ・K・L－1～5グリッドの7基の小竪穴である。まわりに柱穴様の子穴24個が濃密に発見されている。この辺りは褐色土がほとんどなく、砂礫層上面が遺構確認面である。また遺構の壁は砂礫層のため崩れやすく、遺構内にある石も人為的に入れたものか、埋没過程において入り込んだものかの区別は出来ない。37P・40P・44Pは平面形が円形を呈す。40Pは確認面よりやや下がったところから一括土器が出土している。この他の多くの小穴はどのような性格のものかは不明である。

南のグループにはM・N－1・2の4グリッド内に小竪穴8基、小穴9基が発見された。いずれも壁は砂礫層を掘り込んでいるため大変崩れやすい。21Pは今回調査された小竪穴の中で最も大きい平面が円形の小竪穴で、上端の直径は120cm、深さ45cmである。遺構確認面が深いためか、全体に縄文時代小竪穴としてはやや浅いように思える。

最後に、以前の調査と併せると縄文時代集落の構造をより充実させることができるであろう。いずれ、大型石匙など出土品の整理を通して、土壙墓群の分析を試みたい。

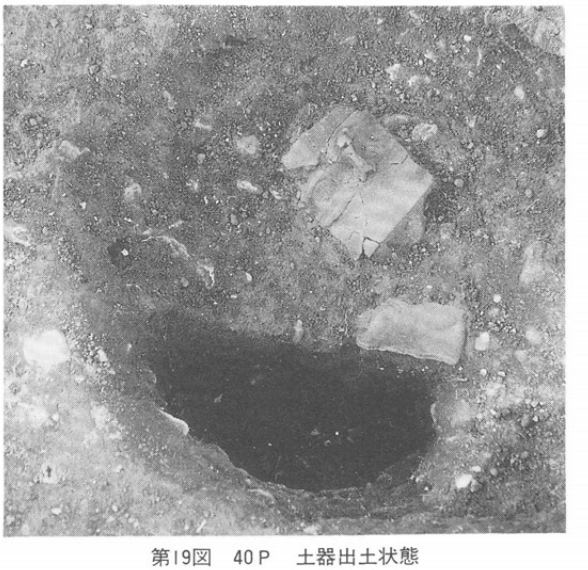
7．出土した遺物　縄文土器2　弥生土器2　土師器坏1　灰釉陶器皿2　灰釉陶器壺1　石鏃26　石錘3　石匙3　打製石斧22　磨製石斧4　凹石17　摺石10　土器片石片13箱

今回の調査では、縄文時代の遺構は小竪穴が発見されたが遺構の中からの出土遺物はほとんどない。しかし、47Pからは石匙が2点出土し、35Pからは磨製石



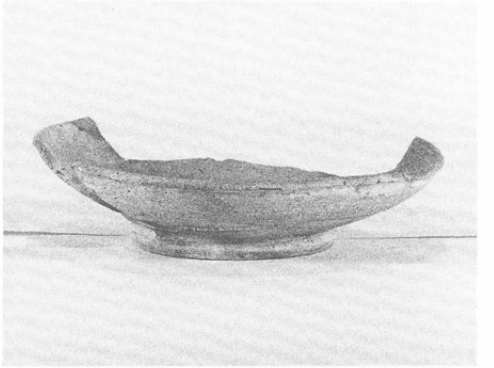
第17図　66号住居跡平面図（1：80）

第18図　37P　黒耀石と土器底部

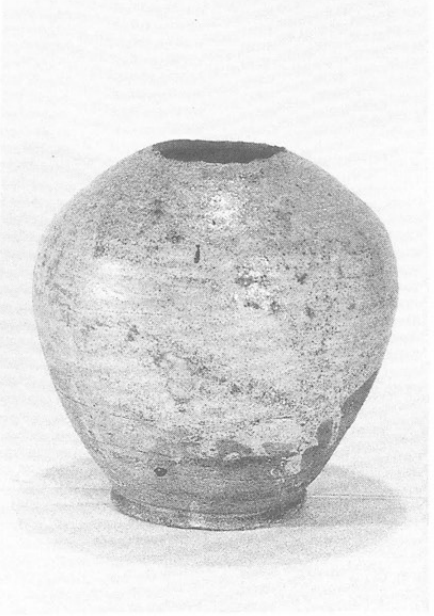

第19図　40P　土器出土状態

斧が出土している。石器の多くは包含層からの出土である。弥生時代住居跡が4棟発見されたが、覆土が薄いことや、掘り込みの深い平安時代住居跡と重複しているため覆土中の遺物が少ない。

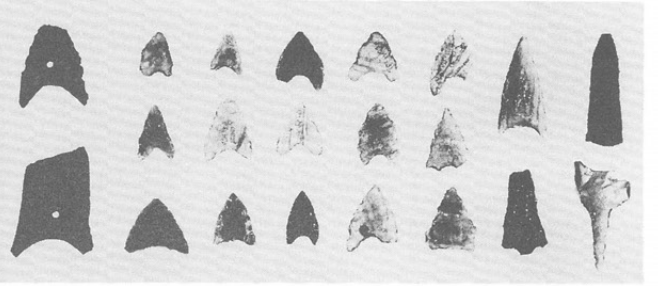
註1　「海戸」昭和42年　岡谷市教育委員会



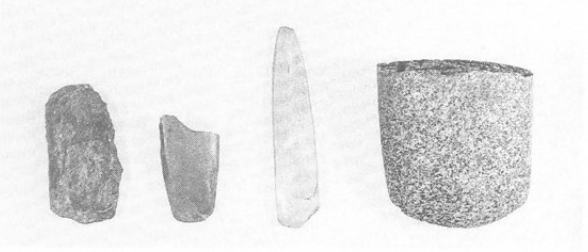
第20図　灰釉陶器皿



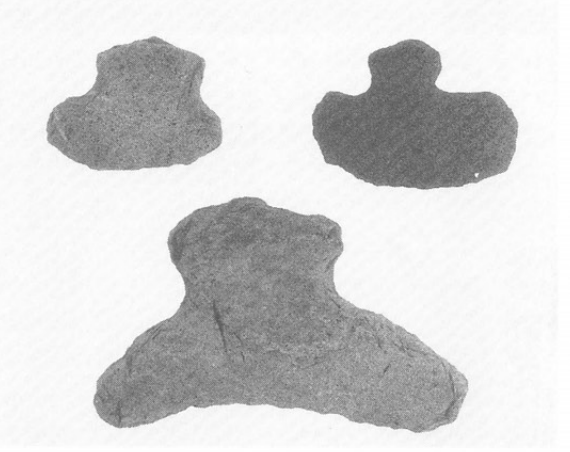
第21図　灰釉陶器壺



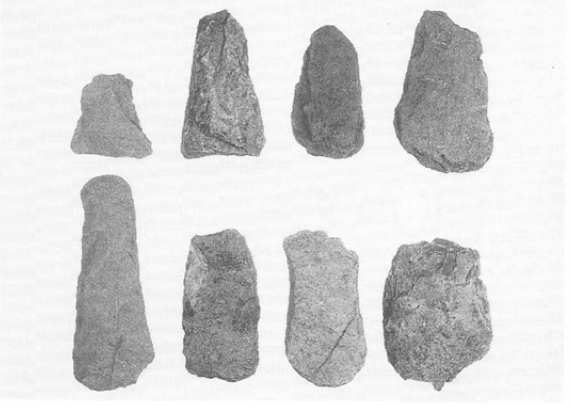
第22図　石鏃・石錐



第23図　磨製石斧



第24図　石匙



第25図　打製石斧

第26図　凹石・摺石

4．地獄沢遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市字上ノ原２１６－１外
2．土地の所有者　高木　忍外
3．発掘調査の期間　平成４年４月14日～９月２日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　１７０８㎡
6．発見された遺構　縄文時代中期初頭住居跡５棟
縄文時代中期小竪穴434基
7．出土した遺物　縄文土器10　石鏃20　打製石斧77　磨製石斧８　石皿３　凹石21　土器片石片20箱

（１）住居跡

１号住居跡　Ｉ－３グリッドを中心に検出された住居跡である。住居跡番号は発見された順序で付けられており、後述の２・３号住居跡は拡張調査に伴って検出されたものである。本跡は西側の２号住居跡を掘り込んで構築されたもので、西壁は小竪穴などに分断されているが、その壁高は、最高部で13cm、北側では８cmの高さを残し、床面には緩傾斜で続いている。住居跡に伴う柱穴は深度、配置などから２箇所が想定され、西南の柱穴は平面形が楕円形を呈するが、坑底は円形に掘られている。床面は地山の礫が露出しているために凹凸が見られるが、ほぼ平坦で堅く締っている。焼土は先の柱穴と想定される線上に検出されるため、位置的に見て、この住居とは関係がないように思われる。

２号住居跡　Ｉ－４グリッドを中心に発見された住居跡である。残存壁から察すると、平面形は円形になると思われるが、壁は各所で小竪穴に切られている。また、東側は前述の１号住居跡によって切断されており、かつ上部が攪乱されていたので、南北壁は捉えにくかった。壁高は西側で10cmであり、１号住居跡同様に緩傾斜となって床面に続き、その床面は凹凸があるものの堅く締まっている。

第27図　Ｉ・２・３号住居跡と小竪穴

第28図　３号住居跡　黒耀石片集中

第29図　４号住居跡　礫出土状態

第30図　遺構確認状態

主柱穴と思われるものは確認されなかったが、位置的には、小竪穴の13•415Pなどに重複されているとも考えられる。炉は1号住居跡の西壁に接して、中心より北側の位置で地床炉が検出された。火床面であるローム層は深さ約2cmが赤化していた。

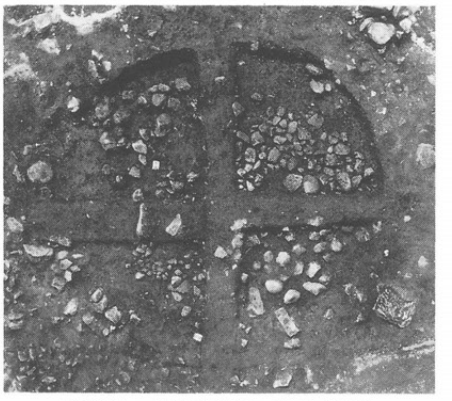
3号住居跡　H－2グリッドを中心に検出された。先の1号住居跡の東側となり、調査区の東先端に位置する。検出の端緒は1号住居跡の床面を調査の折に、段差2～3cmをつけた床面を確認したことである。しかし、この床面も多くの小竪穴によって切られており、住居跡の平面形や規模などは明確とならなかった。これら小竪穴のうち、438Pは貼床面が見られたことから、本跡より古くに穿かれた遺構であるのに対して、433・434・435・439Pは住居貼り床面がないことから新しい遺構と考えられる。床面は先の1・2号住居跡に比して、地山に礫を含んでいないために平坦で軟質であった。

炉は地床炉で、地山を3～4cmほど掘り込んで構築されている。掘り込み内には焼土が堆積しており、火床面であるローム層も深さ2cmほどが赤化していた。また、北側にも焼土が見られたが、この住居跡には関係がないと思われる。

遺物の出土状況のうち、床面からの出土遺物について見ると、第1に黒耀石の小剝片があげられる。2箇所から集中して出土したが、そのうち1箇所は、西壁と想定された438Pの脇の小ピットの縁から礫状の原石3点と剝片が出土した。次の箇所は、炉跡の北西の50cmほど離れた地点から、黒耀石の細剝離片数十片の検出をみた。しかし、これらの遺物を、ただちに3号住居跡に伴うものと判断でき兼ねるので、今後の検討結果を待ちたい。

1～3号住居跡出土遺物　3軒の住居跡から出土した遺物は土器・石器・石片等である。土器は破片のみで、器形を窺えるものはなく、また、住居跡が重複し、さらに、小竪穴もいくつかが重なっているところから、相当量の遺物が混入していることが考えられるので、各住居跡の時期決定を困難にしている。本稿では細部段階のことは避けて、大まかに中期初頭の遺構・遺物として捉えたい。

4号住居跡　P－23，Q－23グリッドを中心に検出された。この地点は、今回の調査範囲からすれば、地獄沢台地の最上部にあたり、また最西部にもあたる。本跡は調査の当初から耕作土中に土器片などが検出され、注意された地域であった。結果的には、発掘された住居跡の床面から茅の鬚根が一面に見られるほど浅い地層での遺構であり、遺物の相当量が露出散逸していることが窺える。



第31図　5号住居跡　礫出土状態

第32図　5号住居跡　遺物出土状態

第33図　5号住居跡　遺物出土状態

竪穴の大きさは直径 3.4mの平面円形と思われるが、東側は地山が傾斜しているので壁が残っていない。西側の壁高は22cmであり、なだらかに立ち上がるものの地山の礫が露出しているので整然としない。床面も礫によって凹凸が見られるが、非常に堅く締まっている。

本住居に伴う柱穴は5本検出され、深度、間隔、配置から4本が主柱穴と思われる。しかし、南側の柱穴2本は、掘り込みも浅く、P－3は12cm程度の掘り込みで疑問も残る。この2本の柱穴の脇に、やや傾斜をもつ柱穴が見られるところから、主柱に対する控え柱と思われ、床面の礫などの障害によってこのような手法がとられたのではないかと考えられる。

炉については、住居跡のほぼ中央部を直径80cm、深さ20cmを掘り凹めているが、炭化物も余り見られず、焼土も若干見られた位で疑問も残る。

また、竪穴覆土には発掘当初の段階から多量の礫が見られ、特に中央から西側に大きな石が存在したが、これは埋没過程において人為的な行為があったことを示している。

4号住居跡の出土遺物　遺物の出土については、先述のように覆土中からのものが多く、床面からの出土は少量であった。種類としては土器・石器・石片等であり、土器の器形を窺えるものは1点のみで、床面からの出土が極めて少ない。

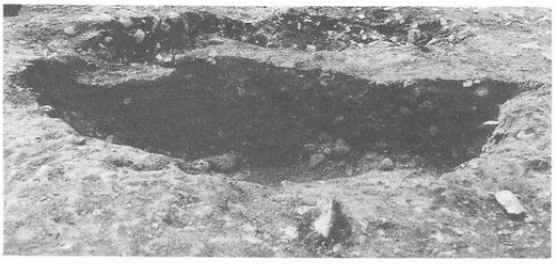
5号住居跡　O・P－13グリッドを中心に位置している。住居跡竪穴は長軸（南北）4m、短軸（東西）3.5mで、楕円形を示している。4号住居跡と同様に斜面に構築しているために東壁は不明瞭である。壁については、西側は壁高約30cmを残し、垂直に立ちあがって、地山の礫が露出し、特に北側の壁は発掘時に崩れる状況にあった。

住居に伴う柱穴は4本が想定されるが、あまりに間隔は不揃いで、加えて柱穴の穿ち方も粗雑である。これも地山に礫を多く含んだがための結果として見ることができようか。

炉については当初住居跡中央部の北寄りに直径1m、深さ20cmの掘り込みを想定したが、炭化物、焼土は見られなかった。なお、東側の柱穴跡と考えられる付近で、床面より10cm上部に厚さ5cmの焼土塊が検出された。これは位置的に見ても、出土層位からしても、本跡に直接結びつくとは思われない。

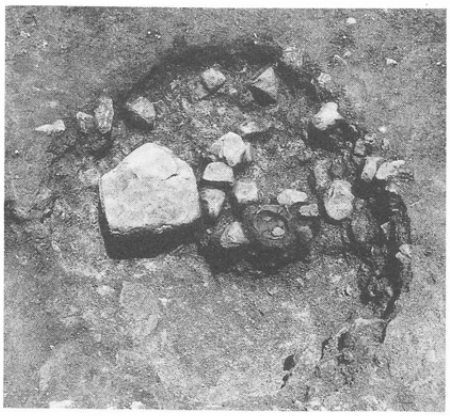
さて、本跡においても住居跡の覆土内から多くの礫が出土した。そのうち、西側の最奥部には、両面平坦の礫13個を床面に接して置いてあったが、礫の上面が水平であることから単なる投込みとは考えられず、注意を要する配石といえる。その他の礫は、床面から4

第34図　5号住居跡　完掘



第35図　434P　土層堆積状態

第36図　434P



第37図　57P　遺物出土状態

～5cm上のところから出土したものが多く、その状況は、西側は大小の礫が混在、南側は大きな礫、東側は大小の礫の混在の分布差が見られた。それらの間に一括土器や石器も見られ、床面に接したところからも出土しているので、遺物の多い住居跡といえよう。

5号住居跡出土遺物　本住居跡から出土した遺物は、土器・石器・石片等である。土器は器型の窺えるものが有り、4点以上を数える。また、出土状態から覆土中のものと、住居跡床面に接したものに大別でき、時期決定を位置づける資料も出土している。その文様は竹管状工具による施文、文様の構成などから中期初頭に比定される土器である。

（2）小竪穴

57P　R－18グリッドで検出された。北側の202Pを切断して構築している。平面はほぼ円形、断面はタライ状を呈す。口径110cm、底径100cm、深さは坑の中央部で38cmである。地山が東側に傾斜しているために東壁は浅い。覆土の堆積は、内部は黒褐色土で、壁際と底部は暗褐色土であり、自然堆積と思われる。坑の縁から若干下った面から拳大の礫が多く見られ、それらの中央に位置するところから小型の土器が斜位の状態で出土した。文様は平行沈線文、刺突文から中期初頭に比定される土器である。なお、北側の壁近くから両面扁平のやや大きい礫が見られたが、意識的に置かれたとは解されない。

69P　T－13グリッドで検出された。西側に220Pが接している。平面は円形、断面は深皿状を呈す。口径80cm、深さは最深部で22cmである。覆土は暗褐色土であるが、その土層中から底部を欠いた深鉢が逆斜位で出土した。その割口に寄りかかるかのように、両面平坦の礫が置かれていた。

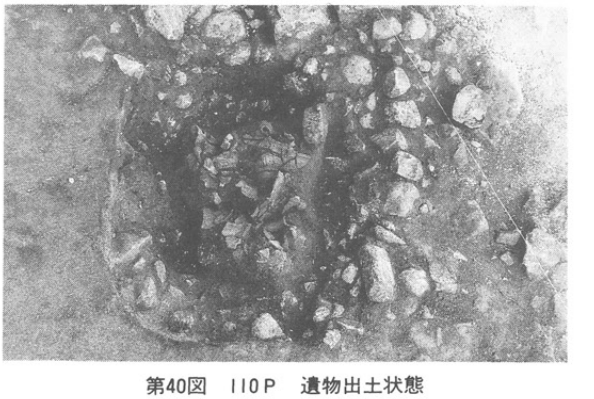
また、坑底部には小礫が詰まった状態にあったことも注意される。出土土器の詳細は省略するが、竹管状工具による施文などから中期初頭に比定される土器である。

72P　R－13グリッドで検出された。平面は楕円形、断面はスリ鉢状を呈す。口径の長軸は40cm、短径は35cm、地山に傾斜があるので、西壁は40cm、東壁は30cmである。覆土は黒褐色土によって堆積されているが、北側壁に接するところで、ロームブロックの入った暗褐色土も見られた。遺物は東側壁の地山の縁にかかるようにして、一括土器の半個体が重なりあい、内側を上に向けた状態で出土した。出土土器は文様から中期初頭に比定されるものである。

122P　V－18グリッドを中心に検出された。平面は隅丸長方形、断面はタライ状を呈する。口径長軸144cm、短軸80cm、深さは30cmである。覆土は上面から1層は

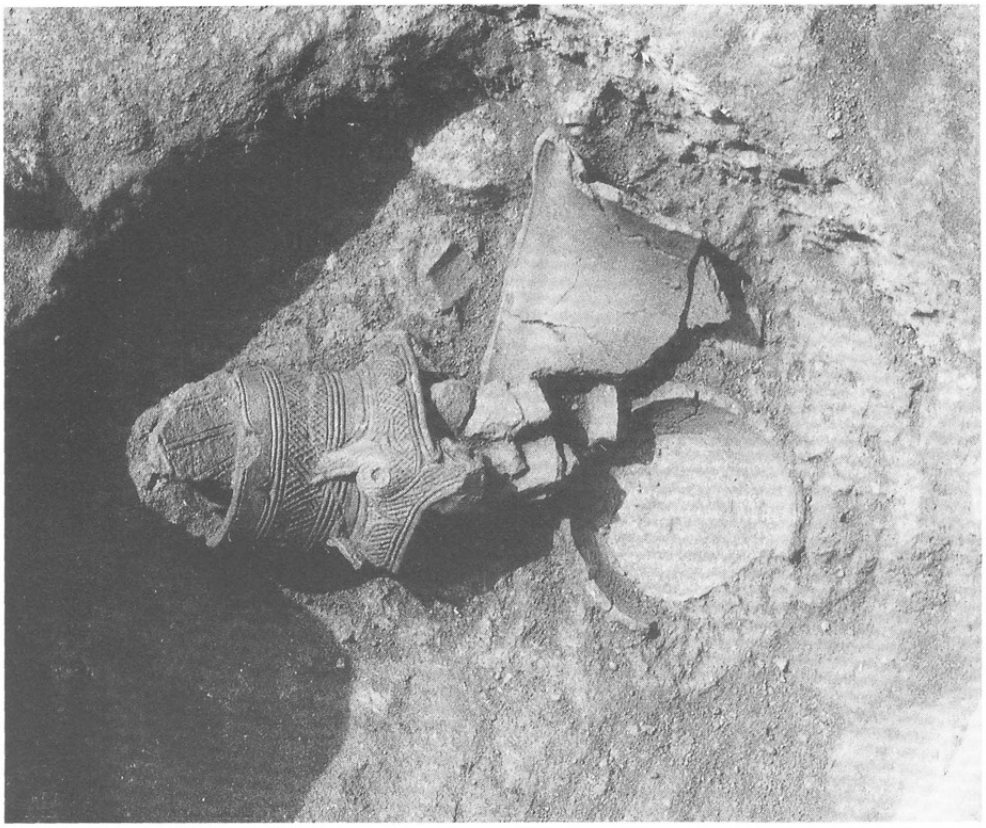
第38図　69P　遺物出土状態

第39図　72P　遺物出土状態



第40図　110P　遺物出土状態

第41図　122P　遺物出土状態

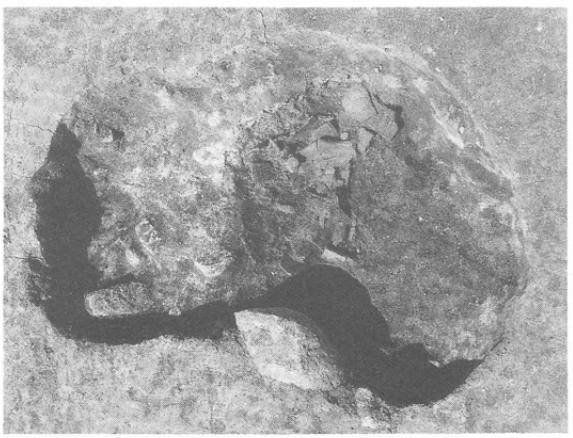


第42図　143Ｐ　遺物出土状態

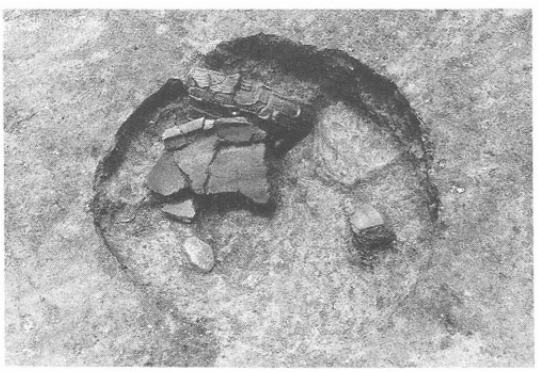
黒土層、２層は黒褐色土層、３層は暗褐色土層がレンズ状に堆積されており、自然堆積と思われる。１・２層ともに大小の礫が詰まり、それらを除去すると、東壁の北よりの地点からほぼ完形の小型土器が正位で出土した。坑の底部には礫が敷詰められた状態であるが、この小型土器はその上に置かれたものと思われる。

143Ｐ　Ｎ－５グリッドで検出された。西側の336Ｐを切って構築している。平面は地山の礫を残して穿っているために変形しているが、円形とされよう。断面はタライ状を呈す。口径90cm、底径80cm、深さ29cmである。覆土には多量の木炭粒子・ローム粒子を含んだ漆黒土が堆積していた。

ここで特筆されるのは土器２個体の出土である。その出土状況は、遺構の中心部より東によったところに、両面扁平の自然石が傾斜した状況で出土し、その脇には礫５個程が残存しており、それを除去したところ、底部を欠いた深鉢土器が逆斜位で出土した。また、その下部からは大型深鉢の１個体が破損した状態で出土。その底部は坑底に接するように正位で出土した。結果的には合せ口の状態で埋設された２個の土器のうち下部の土器が上からの圧力によって、壊裂されたとも解される。また、先述の69Ｐの逆斜位の例、122Ｐの正位の出土例などにも類似しており、他例など参考に



第43図　143Ｐ



第44図　151Ｐ　土器出土状態

して検討しなければなるまい。

出土土器は、両者とも竹管工具による文様手法から中期初頭に比定される。(表紙写真)

151P　I－8グリッドで検出された。この付近は小竪穴の分布が希薄の地区である。平面は円形、断面はタライ状を呈す。口径86cm、底径60cm、深さ24cmである。

さて、ここでも特筆されるのは、胴、底部を欠く1個体の土器が出土したことである。坑の東側の縁に接する状態で、同一個体の半分が内側を上に向け、重なるようにして、あとの半分を表にして出土した。背中合わせの状態で封入したことになり、どのような意図を持ってのことか、小竪穴の性格を考える上で検討を要する。

出土した土器は、口唇部に突起を有し、口縁部と胴部上半に幅の狭い楕円区画文などを有しているところから、梨久保遺跡の中期中葉I期に比定されると思われる。

331P　M－10グリッドで検出された。本地域は地山に礫が特に多く、発掘時に難渋した箇所である。本跡は371Pを切断して構築されたものであるが、平面は地山の礫が障害となって不整楕円形になっている。底部にも大石が突出した状態のままで終わっている。タライ状の変化といえよう。口径は長軸120cm、短軸90cm、深さ40cmである。覆土は黒褐色で特筆すべきものはないが、拳大の礫が多く含まれ、西側壁近くに長さ25cm、最大幅10cmの石柱状をした礫が斜位の状態で出土した。これに類似した例として、366Pにもあり検討を要する。

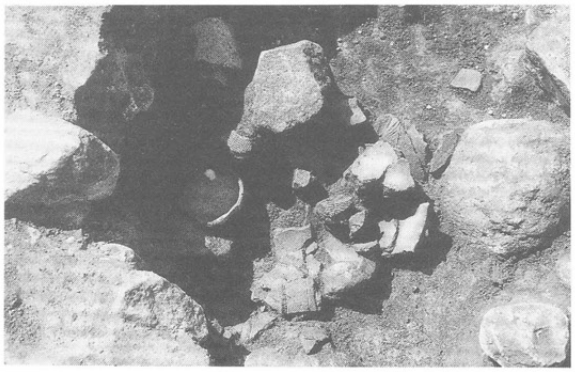
さらに底部に接して、鉢型土器の半個体が、地山の大石を枕にするような状態で出土した。この土器は、口縁部に幅の狭い楕円区画文を有し、区画文内に斜行沈線文がつけられた中期中葉期の時期と思われる。

342P　K－7グリッドで検出された。本跡も地山の礫に妨げられたために変形した円形と言える。長軸70cm、深さ23cmのタライ状を呈するが、東側壁ぎわに小穴を有する小竪穴である。覆土の堆積は下面の暗褐色土、上に黒色土がレンズ状になっており、自然堆積の状態である。その黒土層下部から小型土器の底部が出土した。

383P　G－4グリッドで検出された。北西の9Pを切って構築している。この地域も地山に多くの礫を含んでおり、坑の縁部にも礫が突出するなどで変形している。口径長軸187cm、短軸約100cmで、坑底は円形の50cmを示している。深さは東壁で58cmで、西壁が袋状をなしている。覆土中に多くの礫に混って、土器が散乱した状態で出土した。底部はやや離れた位置に正位

第45図　331P　遺物出土状態

第46図　342P　小型土器底部出土



第47図　383P　遺物出土状態

第48図　62P　石皿出土状態

で出土するなど、興味を持たれる出土状態である。土器は文様の竹管工具による手法から中期初頭の時期と思われる。

62P　R－15グリッドで検出された。ここでは4基の小竪穴が重なり合って発見されたが、62Pを中心にするならば、北側の63Pを切り、東側の67P、西南側の64Pに若干の切られた状況にある。この例も地山に礫が含まれているために上面は不整形で、長軸 130cm、坑底78cm、深さ50cmである。断面はタライ状を呈しているといえる。

覆土中から土器片が若干出土したが、67Pに接する南東側から石皿が壁に立て掛けられた状態で出土した。石皿は安山岩製で、楕円形を呈するものの先端部を欠いている。硯の名称でいえば、「池」の部分を欠いていることになる。

84P　P・Q－9グリッドで検出された。平面は楕円形、断面は底部に凹凸もあるが、タライ状を呈している。口径長軸74cm、短軸50cm、底径長軸66cm、短軸44cm、深さ30cmである。覆土中の礫に混って、石皿が表を向けて出土した。形態は62P出土の石皿とほぼ似ているが、先の例でいえば「岡」の部分を欠いていることになる。

306P　O－5グリッドを中心に検出された。この地域も多くの小竪穴が検出され、この場合は4基の小竪穴が、切り合って並んでいる1基であり、305Pを切って構築している。平面は円形、断面は口縁の窄まる典型的な袋状の小竪穴である。口径96cm、底径74cm、深さは70cmを示している。内部の礫の状態を見ると、底部には大きめの礫を置き、その上部にはそれより小さめの石を重ねる状態であった。

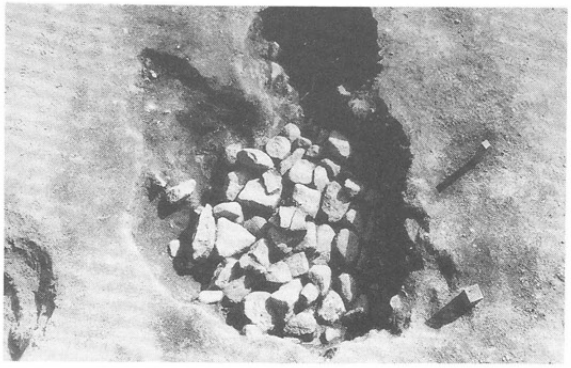
411P　N－3グリッドを中心に検出された。西側の412Pに若干切られている。平面は不整楕円形、断面はタライ状を呈す。口径は長軸120cm、短軸108cm、深さは30cmであり、東側の壁は袋状をなしている。上部の小石混じりの暗褐色土を除去すると、拳大よりやや大きく、比較的揃った礫を底部まで詰ていた。

345P　J－5，K－6を中心に検出された。平面は不整円形、断面はタライ状を呈する。底部には地山の礫が露出しているので凹凸が見られる。口径120cm、深さ50cmを示し、底部は地山の礫が露出しており、それに接して小さな礫が置かれている。その上部に平板の礫を乗せて基盤を作っている。壁側にはドーナツ状に木炭粒子を含んだ褐色土が入り、上部から平板の礫まで、小石から拳大までの礫が充満していた。その総数は312個に達し、少数ではあるが焼石もあった。また、煤の付着したものが多くあり、本小竪穴の用途については即断できないが、油脂質の物品の燃焼によって生

第49図　84P　石皿出土状態

第50図　322P　石器出土状態

第51図　306P　袋状小竪穴内の礫



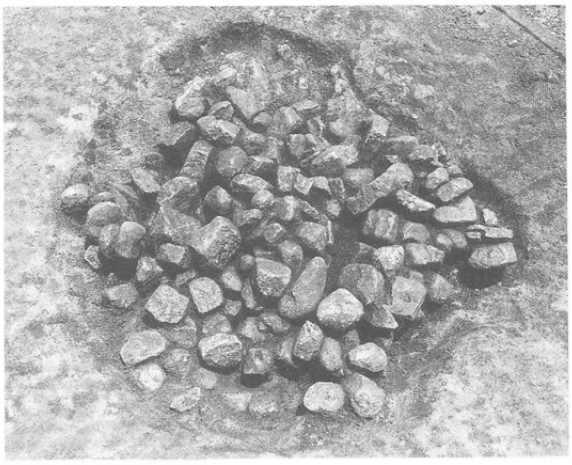
第52図　411P内の礫

じたことは充分考えられ、焼石炉と見てよいであろうか。

（4）小　結

本遺跡は、住居跡については重複するものも含めて5棟が検出され、小竪穴は434基に及びたくさんの土器・石器の出土があったことは、中期初頭前後を見る上で、好資料となることは間違いあるまい。

これら住居跡と小竪穴の分布について見ると、まず住居跡間の間隔は、1～3号住居跡を1棟と仮定するならば、20m前後の隔れている距離に3棟が点在していることになる。その住居跡の間に小竪穴が分布しているのであるが、その分布にも濃淡が見られるので、住居跡別のグループ分けも可能である。また、5号住居跡の南側は小竪穴も少なく、空白部分もあるところから、住居、貯蔵穴、あるいは墓壙などが、ほぼ環状に配置されていると思われる。しかし、南側の地域は調査面積も狭いので、早急な結論は控え、今後の調査結果に期待したい。



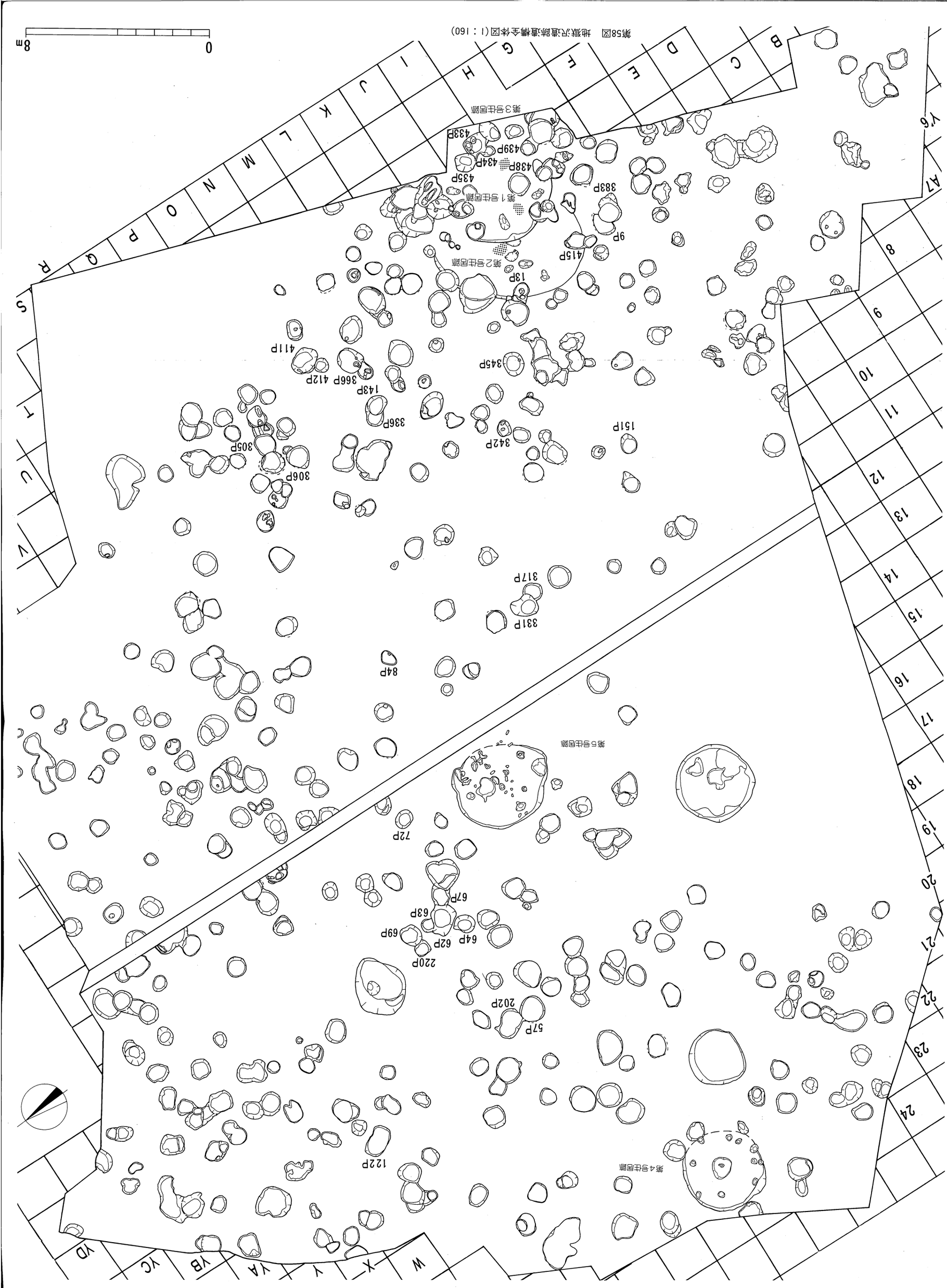
第53図　345 P

第54図　69 P　出土土器

第55図　366 P　出土土器

第56図　5 号住居跡　出土土器

第57図　143 P　出土土器



第58図　地獄沢遺跡遺構全体図(1：160)